

SETOUCHI ARCHITECTURE JOURNAL

瀬戸内アーキテクチャージャーナル ドッツ

JANUARY 2014 vol.1

特集 | 丹下健三と愛媛の建築

# DOTS

TAKE  
FREE



photo: David Tortosa

# 藤森照信「丹下健三と愛媛の建築」

丹下健三生誕一〇〇周年記念講演会『丹下健三と愛媛の建築』より

2013年は、日本を代表する建築家・丹下健三の生誕百年にあたる年でした。丹下健三は大阪府で生まれ、少年期を愛媛・今治で過ごしています。丹下健三の育った愛媛では、今治市庁舎・公会堂、愛媛県民館（解体）や愛媛県民文化会館（ひめぎんホール）など、丹下健三によって複数の建築が生み出されています。ここでは丹下健三と愛媛・瀬戸内との関わりに焦点を当て、『丹下健三』を著した藤森照信さんにお話をいただきました。

## 丹下健三の生い立ち

丹下家は、もともととは——室町時代頃だと思えますが——大阪の南にある小さなお城の城主だったそうです。それから今治に移ってきた。丹下さんのお父さんは住友銀行に入って、大阪の支店の頃に丹下さんが生まれます。その後、武漢に移り、それから上海支店に移っています。そこで丹下さんはちゃんと記憶を持っておられて、日本租界の洋風の建物に住んでいたそうです。でも小学校二年生の時にお兄さんが急に亡くなったので、お父さんは愛媛に帰って、お兄さんが経営していたタオル会社を継ぐことになった。丹下さんは今治の別宮というところに住むんですけど、その時に初めて日本建築を見た、茅葺きの暗いイメージでびっくりしたとおっしゃっている。家にはオルガンがあつて、普通の子供たちとは全然違つたらしい。経済的には相当恵まれていました。勉強も大変できて、飛び級で中学を卒業するわけです。でも、県内屈指の学校である松山中学には行かなかつた。理由は、お母さんにもすごく溺愛されて、このままでは自分がだめになる、松山へ行けば母から離れられないと思ったそうですね。それで旧制の広島高校に入られるわけです。とにかく今治から離れたかった。

広島で三年を過ごして、雑誌でル・コルビュジエの「ソビエトパレス」の案を見て、建築家になろうと決心した。丹下さんは文学も映画も、演劇も思想も好きだった。すごく優秀な生徒だったんです。理系と文系と両方できる人だったんです。それで東大を受験するんですけど、全然勉強をしないんですね。落ちて、二浪する。二年間東京で遊んでいるんですが——それは放蕩の限りを尽くしたそうです。それは恐らくマザーコンプレックスがすごくて……とにかく

母親が嫌がることをひたすらやった。でもあんまり遊びすぎて、お母さんからあるとき手紙が来て、丹下さんも目が覚めた。家に帰って、とにかく寝る間も惜しんで勉強した。妹さんによると、三か月間、トイレに行く以外は、二階の自室にこもり、勉強していた。顔も青ざめていて、死ぬんじゃないかと思つた……と言っていました。

丹下さんはそれから世界の建築家になっていくわけですが、今治、愛媛県で育つたという意味は大きいと思つています。丹下事務所では設計する時に、海が見える場所であれば、海を見るための場所を作らないと丹下さんが納得しなかつたそうです。そして新しくできると、必ず海を眺めた。傑作といわれるものは海に近いところにありますが、例えば広島島のピースセンターがそうですし、香川県庁舎もそう。淡路島にある戦没学徒記念館からも、海が素晴らしく見えます。そして、海があまり見えないところでも、無理してでも見えるようにしようとして作られているものもあります。例えば、倉敷市庁舎や今治信用金庫がそうです。海を見るための階段状の、異様な屋上があるんです。屋上庭園というか、屋上が階段状になっている。ほとんど丹下さんのための展望台のようなものです。それくらい海が好きだった。

## 建築の配置と瀬戸内

代々木のオリンピックプール（国立代々木競技場）は丹下さんの建築の中で最も重要ですが、大プールと小プールがあつて、その間の「回廊」を通るという配置になっている。つまり、軸線の左右に違う形のもの、大きいものと小さいものがポコポコとある。これが配置上の特徴です。普通はこういう配置はしないんです。ヨーロッパであれば、こういう建築では記念碑性が求められる。伝統的には、正面上にドーンと大きなものを作る。日本の場合、唐招提寺や東大寺などのお寺もそういうやり方ですが、神社の場合は基本的に正面に大きいものを置かないで、左右に大きいものと小さいものを配置して、その間を通っていく。通る時に祠があつたりして、だんだん気持ち盛り上がっていく。丹下さんはそれを「環境的記念碑性」といいます。軸を通して、正面にあまり大きいものを置かないのが丹下さんのやり方で、これは群のものをつくる時に生涯一貫しています。

これは弁証法的なやり方なんだと。弁証法というのは、ある一つの主張があつて、それに対立するもう一つの主張があつて……対立するものを通してもう一つの新しいものに向いていくというのが弁証法の論理です。それを造形でやる人はいないんですが、言葉の論理だけではないところが特徴的です。

建築家になろうというきっかけになった、ル・コルビュジエの「ソビエトパレス」案もそうした配置です。ただ、ソビエトパレスに影響を受けた建築家は世界にいっぱいいますが、配置に影響を受けた人はいない。どうも丹下さんはソビエトパレスに出会う前からこういう造形感覚を持っていたんです。でもそれがどこから来たのか……ずっと分からなかつた。手がかりとしては、丹下さんは海が好きだった。子供の頃の遊びといえば、近くの浜辺だったそうです。丹下さんが見ていた瀬戸内の光景はそうとう特徴的なものですよ。波がキラキラ光つて、真つ平らな海の上に、いろんな形の島々がぼこぼこあつて、そこに太陽が沈んでゆく——それとピンときたんですが、丹下さんには瀬戸内の光景が染み込んでいたのではないかと丹下さんの独特の、軸線をピシと通し、その先にシンボリックなものをチョンと置き、その周りに違う形を配置していくというのは、子供の時に見た瀬戸内の光景ではないか。丹下さんの一番基にあつた造形感覚というのが分かつたという感じがしています。



藤森照信

1946年生。建築史家、建築家。工学院大学教授、東京大学名誉教授。

## 丹下さんには瀬戸内の光景が染み込んでいたのではないか。

——「愛媛県民館」について教えてください。  
愛媛県民館では構造を坪井善勝さんという方が担当されていますが、丹下さんが卵の殻のような「シェル構造」を作ったのはこれが最初です。当時の担当者から聞いた話ですが、愛媛県民館の模型を作ってみると、頑丈で全く壊れない。坪井さんは、これでは自分の能力が発揮できないからやめると言つたそうです。丹下さんはそれで以降、もっと複雑な構造をやるようになり、やがて東京カテドラル聖マリア大聖堂という名作を作りますが、そこに到達するまでの第一号。この前にもっと小さな実験的なものも作っていますが。

それまでのシェル構造はP・L・ネルヴィイというイタリアの構造技術者がリードしていましたが、それは「リブ付きシェル」といって、リブという網目状の出っ張りが出てくるんです。でも愛媛県民館はリブ付きシェルではなくて、卵の殻のようなシェルをやつた。それは新しい試みです。

この建築で苦労したのは、一気にコンクリートを打たないといけないということだったそうです。コンクリートの打ち継ぎができないから、昼夜を問わず徹夜で打ち続ける。心配なのは途中の雨。雨が降ると微妙に調合したコンクリートが全滅しちゃいますからね。当日はちよつと降つたけど、なんとかなつたということです。

——愛媛県民館が解体されたのは残念です。

丹下さん自身はあまり頓着しなかつたので……そういう意味では困つた人です（笑）。

お寺や神社を壊そうという人はいませんが、公共建築——例えば公民館や学校は、江戸時代におけるお寺のようなもの、つまりみんなのために作られた、ある時代を代表するものといえます。民間の建築では、震災が起つても使えませんが、地域のシンボルにするわけにもいきませんから、公共建築をちゃんと作るのには大事なことだと思います。公共建築を安くと作って残していくことは大事です。残つていれば、耐震改修もできるし、きれいにする技術もありますから。

——今治の市役所や公会堂にはどのような特徴がありますか。

特徴は構造にあります。「折板構造」という構造を丹下さんが試みた建築ですね。紙を折ると強くなりますが、それと同じことを試みたんです。当時、新しい構造を表現したものを「構造表現主義」といいますが、折板構造の代表例ですね。今治市公会堂は改修されてきれいになっています。

「2013年8月3日ひめぎんホールにて」



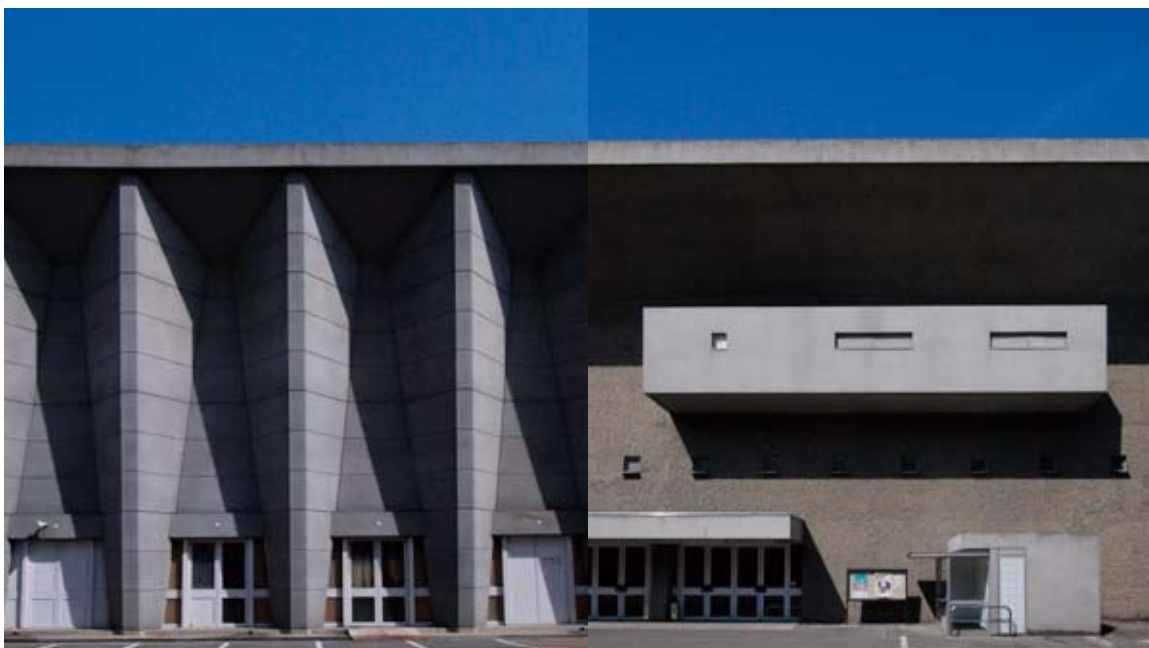
写真 | 北村徹

photo: Toru Kitamura  
text: Takao Shiraiishi

# 愛媛県民館と 今治市公会堂

▲愛媛県民館 | 愛媛県民館は、四国各地で行われた国民体育大会にあわせて、1953年に松山市堀之内に建設されました。観客席とホール部分を覆う半球状の屋根には多数のトップライトが設けられています。丹下健三はこの建築で日本建築学会賞を受賞。1996年に解体されましたが、この写真は解体直前の姿をとらえたものです。

▼今治市公会堂 | 1958年に今治市庁舎とともに建てられた、今治市公会堂。その後建てられた今治市民会館を加えた3つの建築が広場を取り囲むように配置されています。公会堂は2013年に、前年から行われた改修工事が完了。建設当時の空間はそのままに、耐震化や音響・空調設備の改修、座席幅の拡張などが施されました。



# みつはまアート散歩



interview | Mitsuama Art Sampo

11月30日・12月1日に松山の海の玄関口「三津浜」でアートイベント「みつはまアート散歩」が開催されました。三津浜は古くからの港町であり、空襲による被害を受けなかったことから、古い建築が今もなお残るエリアです。

みつはまアート散歩では、この地域の海辺の複数の建築を公開。アートを融合した展示空間が創出され、各ギャラリーでのアートイベントや回遊型のワークショップが行われました。

三津浜の古い建築の魅力をどのように引き出したのか？それぞれの展示空間のデザインやインスタレーションを担当したお二人に話を伺いました。

「海が見える窓辺の小屋」@山谷運送店（現・株式会社山谷）

谷尾尚隆さん インタビュー

——山谷運送店の建築をどのように捉えましたか。

山谷運送店は運送会社として明治28年に創業して、1階の社屋は現在も使われています。外部はいわゆる古典様式といった洋風のファサードですが、内部は和風で2階は座敷と板間で構成されています。内外で和洋の様式がせめぎあうとても興味深い造形ですね。多様な文化が行き交う港だからこそ生まれたデザインだと思います。

——イベントにあわせて新たに「小屋」が設置されています。

「みつはまアート散歩」ではご厚意で2階をお借りすることができました。この2階の板間に愛媛県産の杉を用いて2棟の小屋を作っています。歴史のある建築ですし、普段は見ることができない内部における計画ですから、いくつも模型をつくり慎重に形を決めています。小屋は大きすぎず、小さすぎずちょうどいいスケールに納められたと思います。



——三津浜はかつて久万高原町（旧・面河村）の木材を大坂に運ぶための拠点だったと聞きます。

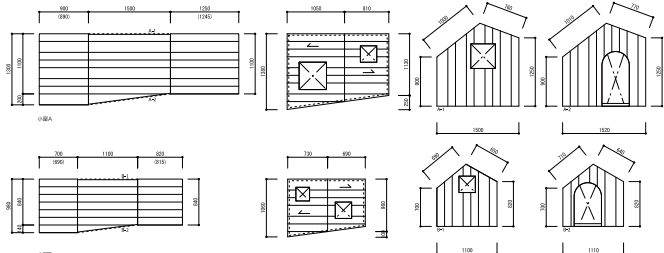
そうですね。松山・三津間の鉄道が開通したのは木材を運ぶためでしたから、多くの木材が流通したことでしょう。

——「小屋」の木目が美しいですね。

板間の床板が時代を経て落ち着いた風合いを醸し出す良材なわけですから、小屋は新木の素地の色を生かして無塗装としています。両方の美しい対比を考えました。

——「小屋」の中からは何が見えるのでしょうか？

小屋の中に入ると窓から海を眺めると夏目漱石の『坊ちゃん』に描かれた「ターナー島」が見えます。海を見渡したりトップライトから顔を出したり、子供だけでなく大人も楽しめるようになっていきます。



「海のそばの賃貸アート・アパート」

山本綾さん（デザイナー）インタビュー

——三津浜には多くの空き家がありますが、古い2階建の家屋をギャラリーとして利用していますね。

古い木造の家屋を「アート・アパート」として開放し、部屋ごとの特徴にあわせて展示を行っています。木や森をテーマに、1階にはちゃぶ台返しができる居間を、2階の海の見える部屋には、久万高原産のお茶を楽しんでいただけるカフェを設けました。

——山本さんは2階の部屋でどのようなインスタレーションを行ったんですか？

カフェの部屋が開放的なので、その対比として、その隣りの部屋を暗くし、音楽と映像によるインスタレーションを制作しました。ボールを蹴る音や扉の閉まる音など、生活の中の乾いた感じとか、そうした音を録音し、組み合わせで編集しています。部屋を森に見立てて、森の映像とともに孤独を感じられる環境を考えました。

## 海のそば、賃貸 アートアパート

### 編集後記

「DOTS」(ドッツ)は、地域資源としての「建築」に焦点を当て、愛媛県松山市を中心に活動を行う瀬戸内アーキテクチャーネットワークによって創刊されました。松山では、道後温泉本館改築120周年や、商業ビルラフォーレ原宿・松山の解体など、街のあり方に関する重大な出来事を迎えています。そうしたうねりの中、様々な事象を「建築」の観点からも捉え、発信できればと考えています。フェイスブックでも、活動の状況や、松山・愛媛を中心とした建築関連の情報を投稿しています。ぜひあわせてご覧ください。活動・支援メンバーも募集しています。

## えひめ建築めぐり

No.001

### ミウラート・ヴィレツジ

四国松山には、建築家・長谷川逸子さんが設計を手がけた建築が点在しています。「徳丸小児科」を皮切りに、1980年代を中心に住宅やテナントビルなどが立て続けに建てられました。「ミウラート・ヴィレツジ」もそのひとつです。

ミウラート・ヴィレツジは私設の美術館で、三浦工業（株）の創業者であり陶芸家として活躍された故・三浦保さんの自作の陶板画や、三浦さんに共感する作家の作品が展示されています。



自然光を取り入れた展示スペース、コンクリートボックスによるアトリエ、空中に浮かぶ金属葺きのゲストハウス。能舞台の設けられたストーンサークルの置かれた庭園も屋外の展示空間として利用されています。

この美術館は、長谷川さんと三浦さんとの度重なる対話から生まれたものであるとのこと。不等辺四角形が好きだ、といった三浦さんの語りは、奥に進むにつれ少しずつ天井が高くなる空間にも反映されています。

DOTS vol.1  
2014年1月発行

発行人 白石卓央  
編著者 瀬戸内アーキテクチャーネットワーク  
協力 NPO法人クオリティアンドコミュニケーションオプアーツ  
ミウラート・ヴィレツジ  
株式会社山谷  
篠原建設  
協賛 創造系不動産株式会社  
創造系不動産スクール  
発行所 瀬戸内アーキテクチャーネットワーク  
790-0923 愛媛県松山市北久米町 912

※この事業は、『坂の上の雲』フィールドミュージアム活動支援事業の助成を受けています。

Setouchi Architecture Network All rights reserved  
www.setouchi-archinet.com  
setouchiarchinet@gmail.com

協賛

